

## 女神たちの競演

内田 満夫

電光掲示板の速報は、一位と二位とが1000分の3秒差。その表示が二転三転し、なかなか勝敗が決しない。場内が騒然とするなか、走り終えた「女神」たちも観衆も、固唾を呑んで写真判定の行方を待っている。

今年の陸上日本選手権最終日（七月六日、東京・国立競技場）のトリ（最終種目）は、女子百メートル障害決勝だった。八名のファイナリストがいっせいにスタートし、わずか12秒後、僅差の集団がゴールを駆け抜ける。全選手が一台のハードルも倒すことのない、みごとにレースだった。

どの女神の表情にも、集中し切った達成感と安堵感が溢れる。みんなが顔見知りの好敵手同士なのだろう。抱きあい、健闘を称えあい、満面の笑みがこぼれ、誰もが饒舌だ。いつのまにか八人の女神たちは、メインスタンド前のホームストレートに座り込み、車座になっている。その中心には、第一人者として永くこの種目を主導してきた先輩格の寺田明日香がいる。

やがて同タイムの一位、二位の判定が確定した。日本記録保持者が三位、寺田明日香が六位という混戦だった。首位争いをした両女神があらためて抱きあう。他の女神たちもそのまわりをとり囲み、両者を

祝福する。

レースの余韻を楽しんでいるのか、結果が判明してからも女神たちはなかなかその場を去ろうとしない。お堅い陸連も最近は、注目・人氣種目をトリに据える粋な計らいをするようになってきている。このレースが最後なので、次の競技準備のために追い立てられることがない。そんななかで現出した女神たちの交歓風景である。

それに輪をかけたのが勝敗のもつれだった。判定にいささか時間を要したために、レース直後の女神同士の交歓、強い絆、勝敗への潔さ、そのドラマを見つめ感情移入する束の間の余裕が、観衆にも生まれたのである。勝敗が決着してからもしばらくのあいだ、一種神々しいまでの歓喜と称賛と感動の余韻が、観客席とホームストレート周辺を漂っていた。

いつまでも去りがたい風情の女神たちだったが、そのうちに立ち上がり、誰言うことなく手をつないだ全員が一行になって、歓声を送ってくれた観客席にあらためて感謝の挨拶をしめくくった。すべての競技が終わっているにもかかわらず、感動の光景に吞まれた観衆の多くが残っていて、女神たちに万感の拍手を送って労う。

テレビ観戦で偶然目にした女神たちの競演。オリンピックアードの女神たちにこれを伝えたら、きっと手放しの称賛を惜しまないことだろう。この日の感動を分かちあえる陸上仲間が、今は近くにない。私としてはそのことだけが、ただただ残念でならない。